

三種類の本

2023. 8. 28

南会津の中学校で教頭職を務めた。単身赴任だった。住居は、学校の目の前の校長住宅だった。あえて、テレビをもっていかなかった。どうせ朝は早いし、帰りは遅いし、ほとんど見ることもないだろうという浅い考えだった。加えて、本を読みたかった。テレビがあれば、きっと見てしまうことになる。

結果的に、これがよかった。夜遅く帰ってきても、30分から1時間くらいは、時間がある。この時間を読書にあてた。テレビがなければ、自然とそうなる。あの頃は、スマホもなかった。読書の仕方は、併読である。数冊の本を同時に読み進めていく。本には、章や節というものがある。これが便利である。読み終えるのに、切りがよい。その点、小説はよくない。切りがよくない。

ある方の話である。「会社に入ったら三種類の本を毎日読みなさい」と先輩から言われたそうである。いわゆる経験というのは限りがあるから、三種類の本を10分でもいいから毎日読みなさいということをお教えされたようだ。

その方は、今でも30分ずつ続けている。もう30年になる。一つは、仕事に関する本である。もう一つは、時流というか、時代の流れを知る本である。3つめが、自己修養の本である。日曜日に、朝から晩まで一冊の本を読み上げるというのは、むずかしい。そこで、少しずつ毎日続ける。継続は力なりとなる。

私の場合はというと、偶然なのかもしれないが、同じである。まずは、仕事の本である。ここには、リーダー論、人材育成、国語関係などが入る。次が、時流の本である。池上彰さんの本を読むことがある。わかりやすい。出口治明さんの本もよい。勉強になる。そして、自己修養である。これは、様々ある。「生き方の教科書」という本がある。読みやすい。伊集院静や塩野七生も、ここに入る。たまに読む小説もそうである。

単身赴任中の夜に、合計5冊から6冊の本を少しずつ読み進めていった。1冊につき数ページである。節でいえば一つである。この方法だと、飽きずに読める。3年余り、このような生活を送った。お陰で、大げさに言えば、人間としての土台のようなものができた。それまでの人生には、なかったものである。これが、この「校長室だより～燦燦～」にも生きているのかもしれない。

最近はというと、併読していない。読むときは、一冊である。だから、すぐに飽きる。これではいけない。インプットできていない。にもかかわらず、アウトプットはしている。また、元のスタイルに戻すしかない。そう、三種類の本である。